木造薬師如来坐像

［登録年月日］昭和六〇年三月三〇日
［種別］有形文化財（彫刻）
［名称］木造薬師如来坐像
［点数］一軀
［所有者等］常仙寺
［所在地等］和田一―六八―一一

有形文化財（彫刻）

木造薬師如来坐像

像高二五・八cm、膝張一六・七cm、臂張一六・七cm、面長六・六cmの檜の寄木造りで彫眼、肉髻珠、白毫は水晶を嵌入している。

光背は輪光で全高四四・七cm、横三一・五cm、光心部に白銅の鏡がはめてある。台座は全高二四・三cm、框張三〇cmの蓮華六重座で、彩色がほどこされている。

常仙寺の本尊であるこの像は江戸時代「寅薬師」の名で親しまれたものである。その由来は『江戸名所図会』によると、かつて三河国鳳来山の麓にあったが、常仙寺開山の存吉がおおかみに襲われた折、薬師が虎に化身して存吉の危機を救った。存吉はこの恩にむくいるため寺建立の際に本尊として安置し、「寅薬師」と呼ばれるようになったと伝えられている。

本像は面長で眼を伏せ、小さく唇を結ぶ顔立ちで、鎌倉から室町時代にかけて流行した宋風の着衣形式を、切れのよい刀さばきで流暢に刻んでいる。細い頸が印象的である。やや繊細化のきらいはあるが、寺開創の慶長七年（一六〇二）頃の造立と思われる仏像である。

【文化財所在地】